

令和 2 年 6 月 11 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02057

研究課題名(和文) 虐待・介護殺人予防としての男性介護者のピア・サポート活動の可能性と課題

研究課題名(英文) Possibility of peer support for male carers as the prevention program of abuse and care homicide

研究代表者

斎藤 真緒 (Saito, Mao)

立命館大学・産業社会学部・教授

研究者番号：70360245

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、男性介護者を含む家族介護者支援の日本での具体化の一環となる。介護殺人の7割が男性加害者、同時に介護殺人の7割のケースで介護サービスを利用していた実態を踏まえ、公的サービスの充実だけではなく、介護者自身に寄り添うインフォーマルなピアサポートが重要であると考えた。とりわけ、男性介護者に介護殺人が多いケースでは、SOSをうまく出すことができず、一人で抱え込んでしまう孤立化が生じやすい。本調査では、男性介護者の会やつどいの開催は、150を超えることが分かった。男性性が強化されることもあるが、感情を通じた新しい男性同士のネットワークの構築の可能性を確認することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

世界的にも介護者支援は重要な福祉政策上の課題となっているが、とりわけ家族責任規範が強い東アジア諸国においては、ケアをしない権利も含めた介護者支援の構想が重要であることを明らかにしてきた。世界的には多様化する介護者に応じた支援の在り方を検討することが重要課題となっているが、ジェンダーに依拠した男性介護者支援という取り組みは、世界的にも先駆的であることが明らかになった。自治体条例として介護者支援を今後広げていくためにも、本研究が明らかにした知見は有益であると考えられる。

研究成果の概要(英文)：This research aimed to develop the support for family carers including male carers. In 70% of cases of care homicide, the perpetrator is male. Furthermore, care homicide families are apparently not isolated, more than 70% of them indeed used the insurance system. In other words, male carers are likely to access to care professionals, but they have not sought help when they couldn't cope. The relationship between masculinity and caring is very complicated. Caring behavior and masculine identity are problematic but not mutually exclusive. In fact, male carers have to negotiate and reconstruct their masculine identity throughout their caring experience and sometimes male carers re-gender their masculine identities throughout caring.

The use of formal care services may not solve the isolation of male carers. What we need is a service that enables male carers to feel safe and secure enough to express negative feelings and, should the need arise, ask for help.

研究分野：家族社会学、ジェンダー研究

キーワード：男性介護者 介護者支援 男性性 ケアの倫理 ジェンダー平等 介護殺人予防 ピア・サポート

## 様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

本研究は、虐待・介護殺人予防という観点から、各地域コミュニティに拡大しつつある男性介護者の会・つどいに注目し、【男性介護者同士のピア・サポート】として位置づけることによって、男性介護者を取り巻くソーシャル・サポート・ネットワークにおける役割を検証することを主たる課題としていた。近年の介護殺人は、介護サービス等の利用があっても生じている点に大きな特徴がある。男性のソーシャル・ネットワークにおける情緒的サポートの限定性という特性を考慮し、本研究では、男性性という観点から、男性介護者の介護実態を分析すると同時に、男性介護者の会・つどいの活動実態を把握するための団体調査、会・つどいに参加する個人へのインタビュー調査を通じて、男性介護者のピア・サポートの可能性を探ることを目的としていた。

ヨーロッパではすでに1990年代後半からインフォーマル・ケアの役割の再評価に関する調査研究が進んでおり、インフォーマル・ケアとフォーマル・ケアとの新たなパートナーシップという観点から、ケアをする人への支援にその射程が広がりつつある。具体的には、無償のケアワークを社会的市民権と結び付ける議論-「ケアする権利」(Knijn, and Kremer, 1998) - や、ケアする人の社会的支援を訴える「ドゥーリアの倫理」(Kitty)などが注目されている。日本でも、欧米での介護者支援に関する制度・政策が少しずつ紹介されているが(三富2008; 2010、羽生2011、笹谷2013など)日本での具体化にあたっては十分論点が整理されているとはいえない。本研究が注目する虐待・介護殺人予防は、介護者支援の支柱のひとつであり、同時に、加害者の多数が男性であることに鑑みれば、ジェンダー・パースペクティブは不可欠である。介護殺人については学術的定義が存在しておらず、虐待の延長線上に位置づけるかをめぐり見解が分かれているだけではなく(染谷、2000; 湯原、2011)、暴力発生要因を男性性と結びつけた解釈が多いが、介護プロセスにおけるケアと男性性の複雑な相互作用については充分解明されているとはいえず、介護過程における介護者の情緒的变化に充分配慮した支援方法の開発が急務であった。なお、本研究では、介護家族のソーシャル・サポート・ネットワークの中で、介護者のピア・サポートが果たす役割に注目する。本研究は、具体的に以下の4つの研究課題から構成されていた。

**男性性/ケア/暴力/ピア・サポートに関する先行研究の検討を通じた理論的枠組みの構築**  
**虐待・介護殺人および関連諸概念の検討を通じた介護者支援の課題の整理**  
**ピア・サポートとしての男性介護者の会・つどいの活動実態を把握するための団体調査**  
**会・つどいに参加する男性介護者に対する個人インタビュー調査**

### 2. 研究の目的

(1) 一般的に介護ニーズが高まる高齢男性のソーシャル・ネットワークは高齢女性と比較して全般的に乏しく、サポート源が配偶者に集中する傾向があり(Antonucci&Aoyama, 1987)、自律性や情緒的統制を重視するため、配偶者以外から情緒的サポートを獲得しづらいとされている(野辺、1999)。本研究では、介護者支援の中でも介護者自身が介護役割を自覚しかつ相対化できるピア・サポートの取り組み(O'Connor, 2007)に着目し、ケアを媒介とする男性同士の情緒的サポートとして位置づけ、その可能性を検討するものである。

(2) 介護者支援の法的基盤整備等は、欧米と比べて遅れていると言わざるを得ないが、男性に焦点を当てた介護者支援実践は、世界的にも稀有であり、2009年の「男性介護者と支援者の全国ネットワーク(以下、男性介護ネットワーク)」の立ち上げおよび、その後の各地域での男性介護者の会の結成と集いの定期的な開催による男性介護者の組織化は、世界的にも先駆的な実践として位置付けることができる。本研究では、International Carers Conferenceを中心とする国際学会への参加および研究報告を通じて、世界的な研究ネットワークの構築を図ると同時に、ジェンダーや世代、エスニシティといった、「介護者の多様化」という観点から、男性介護者の固有性や支援課題をより明確化していくことを目指す。

(3) さらに、日本を含めた東アジアでは、家族主義的な福祉政策が主流を占めており、家族を介護役割に固定化するような介護者支援は、家族主義の転換にはつながらず、むしろ家族主義を助長してしまう可能性がある。介護者支援の具体化を検討するにあたって、アジアにおける家族主義との対峙について知見を広げることが求められる。アジアにおける家族介護の実情と介護者支援の課題について、国際的な研究ネットワークを通じて課題を深める。

### 3. 研究の方法

(1) 全国的に広く拡大している男性介護者の会やつどいについては、統計的な集約や実態把握が行われていない。「男性介護ネットワーク」が把握している団体へのアンケート調査を行い、会の活動の特徴や課題を明らかにすると同時に、ネットワークが把握していない団体の広がり(実数や活動形態)については、インターネットによるリサーチを行った。当事者主体の組織化の他に、介護施設を拠点とした組織化のルート、あるいは、男女共同参画センター・高齢者介護担当の部署など、行政の事業となるルートなど、組織化に向けた多様なルートが確認できた。

(2) 国際的な介護者支援の広がりについては、International Carers Conferenceを主とする研究者および実践者との研究ネットワークの構築を通じて、情報収集を行った。また、2018年9月~2019年9月までの学外研究期間は、シェフィールド大学(イギリス)のthe Centre for

International Research on Care, Labour, and Equality (以下、CIRCLE)に客員研究員として在籍し、イギリスを中心とするEUの介護者支援について、インタビュー調査および学会参加・発表を行った。ここでは、ジェンダーだけではなく、世代やエスニシティ、専門職としてのケアワーカーをめぐる問題などについても、情報収集を行い、介護者支援の今日的な課題を整理した。(3) 欧米との比較という観点において、International Carers ConferenceやCIRCLEでの国際的な研究ネットワークの構築を行い、共同研究(シンポジウム)を通じて、アジアにおける介護者支援の展開における課題の抽出を行った。

#### 4. 研究成果

(1) 斎藤と研究分担者の津止が2015年に参加し男性介護ネットワークの活動を報告した第6回 International Carers Conference(スウェーデン)では、150近い研究実践報告のうち、男性を取り上げた報告は一つのみであったが、2017年の第7回 International Carers Conference(オーストラリア)では、男性介護者がひとつの分科会として設定されるほど、男性介護者という研究課題が世界共通の認識になりつつあることが確認できた。しかし、日本の男性介護ネットワークほど、全国的に組織化されたピア・サポート活動は他国の実践でも確認することができず、世界的にも先進的な取り組みとして高い評価を得ることができた。この報告に向けて、2017年7月には、インターネットを通じて全国に広がっている男性介護者の会・つどいの実態調査を行った。2014年段階では108だった男性介護者団体は、2017年には150にまで拡大していた。また、男性性については、6月にロンドンでの学会(Post Patriarchal Masculinities Conference in: SOAS)に参加し、イギリスでの最新の議論状況について把握することができた。

(2) 介護殺人に関する既存の調査でも、介護開始1年以内に、7割の殺人が発生していること、さらには、発生した事件の7割のケースにおいて、何らかの介護サービスを利用していることが明らかになっている。さらに、加害者の7割が男性であることを念頭におくならば、介護初動期の支援が極めて重要である。また、単に介護サービスを利用するだけでなく、介護者自身の悩みに寄り添った支援が重要であることが分かる。男性介護者の孤立予防という観点にたったピア・サポートの重要性が明らかになった。ピア・サポートの空間は、きわめて多義的な空間であることも明らかになった。介護経験を語り聞くとという相互関係とは、男性が、自らの介護経験を自慢する場、いいかえれば、男性性が発現され強化されたり、男性介護者の間に序列化が生じうる場である。しかし同時に、これまで自ら抑圧し封印してきた(抑圧することを良しとされてきた)感情を表現する場でもあり、従来とは異なる男性同士のネットワーク(ホモ・ソーシャルな関係性)が構築される可能性をも見出すことができた。従来の男性性に依拠しつつも、少しずつ自己変容が生じうる場として、男性介護者のピアサポートを捉えることができる。本研究課題を含めた一連の男性介護者の調査研究については、斎藤および研究分担者である津止との共著書として、2021年2月に中公新書からその成果を出版する予定となっている。なお、男性介護者の会・つどいにかかわる個人インタビューについては、子育てにより出張が難しく、分析できるほどの定性データの集積には至らなかったため、今後の課題としたい。

(3) CIRCLEでの活動期間では、男性介護者にとっての課題の一つである、介護と仕事の両立チームに参画し、イギリス最大の介護者団体Carers UKが立ち上げたEmployers for Carersという介護者支援を目的とした経営者団体へのインタビュー調査を実施することができた(2019年9月)。さらには、EU全体での介護者支援の取組を強化するためのEUレベルでの介護者支援ネットワークEuro Carersの代表との意見交換会や研究所主催のシンポジウムにも参加させていただき、介護者支援をめぐる課題について情報収集することができた。2019年9月にも、スペインで開催されたジェンダーと高齢者介護をテーマとした国際学会で日本の男性介護者についての報告を行った(Caring for Elderly and Dependent People: Promoting Gender Equality and Social Justice, Tarragona, Universitat Rovira i Virgili, 12th-13th September 2019)。E.P. アンデルセン(2008, iv-vi)の言葉を借りれば、「家族の絆を強めたいのであれば、我々は家族に課された責任を『脱家族化』する必要がある」。東アジアだけではなく、「(再)家族化」という傾向が世界的に確認されると同時に、ジェンダーの観点を含む介護者支援の重要性を再確認することができた。斎藤も含めた本国際学会の成果は、電子書籍として発行を予定している(Mao Saito, Male carers and Gender-Specific Support in Japan, in: Dolores Comas d' Argemir and Silvia Bofill (eds.)2020, *Caring for elderly and dependent people: a political and social issue*, Editorial Icaria)。

(4) 東アジアにおける家族主義と介護者支援の課題をより明確化する必要があるという問題意識のもと、2018年3月に、国際シンポジウムを開催し、コーディネートおよび報告を行った(2018年3月18日男性介護ネットワーク主催「東アジアの介護実態と男性介護者」)。ここでは、日本の他に、台湾および韓国からの報告者を招聘し、日本、韓国、台湾の共通点と相違点などをさぐりながら、先進国における介護者支援とは異なる家族主義政策が根強い東アジア諸国における介護者支援の課題について議論を行った。その後も、継続的な研究ネットワークの構築に努めている。

(5) 研究成果の社会的還元の主たる取り組みとして、以下を挙げることができる。2016年4月28日 クローズアップ現代出演「そして男性は湖に身を投げた～介護殺人 悲劇の果てに～」

2016年8月 大津市ケア・マネージャー研修会

2016年11月～2017年2月四日市男女共同参画センター「さんかくカレッジ市民企画講座3回シリーズ息子介護の時代」  
2017年11月レイカディア大学（滋賀県老人大学）「ケアメンを生きる 男性介護者100万人時代の生き方モデル」  
2018年7月 平成30年度京都市企業向け人権啓発講座「介護と仕事の両立」  
2019年12月岡山市男女共同参画センター啓発講座「“息子”が介護するために、知っておくべき10のこと～仕事キャリアとケアキャリアを両立させるには～」  
2020年1月四日市はもりあフェスタエンディングシンポジウム「人生100年時代がやってきた～変えなや！子育ても 行政も 老後も 地域も」  
2020年2月長浜市経営者向け人権啓発講座「介護とワーク・ライフ・バランス - 企業が理解すべきこと」  
2020年2月 日本ケアラー連盟例会報告「イギリスにおけるケアラー支援」

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 齋藤真緒	4. 巻 130
2. 論文標題 書評平山亮著『介護する息子たち 男性性の視角とケアのジェンダー分析』	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 社会福祉研究	6. 最初と最後の頁 132-132
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 齋藤真緒	4. 巻 229
2. 論文標題 <総論> 増える男性介護者の実態と家族介護者への支援の課題	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 コミュニティケア	6. 最初と最後の頁 50-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 齋藤真緒	4. 巻 14巻1号
2. 論文標題 Current Issues regarding Family Caregiving and Gender Equality in Japan: Male Caregivers and the Interplay between Caregiving and Masculinities	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 Japan Labor Review	6. 最初と最後の頁 92-111
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Mao SAITO
2. 発表標題 Peer Support Group for Male Carers in Japan
3. 学会等名 7th International Carers Conference（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Mao Saito
2. 発表標題 Male Carers and Gender Specific Support in Japan
3. 学会等名 Caring for Elderly and Dependent People: Promoting Gender Equality and Social Justice (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----